

園児が端末を操作して

家族写真を壁に映すと、ほかの園児から次々質問の手が挙がった。「どこに出掛けたときの写真ですか?」。鹿屋市のつるみね保育園での一コマ。デジタル技術を使った活動が評価され、教材コンクールで文部科学大臣賞を受けた。同様の受賞が昨年度から続く。

「デジタル保育」を2年半前に導入した。端末のソフトを使い、かるた取りや計算クイズも行う。映像や音声付きのため、園児も挑戦しやすい。「最先端の保育を過疎地

「デジタル保育」への表彰が続く  
つるみね保育園園長

かお

すぎもと まさかず  
杉本 正和さん

でも手軽にできる。保育士が教材を準備する負担も減らせる」と利点を話す。一方、芋掘り体験など保育の9割は「アナログ」だという。「園児をデジタル漬けにしている」という誤解だけは受けないようにしたい

前職は公立小学校教師。17年間で4校に赴任した。2001年4月、1人暮らしの母ツヤさんの面倒をみるため帰郷し、園長を継いだ。ツヤさんの認知症予防のためにタブレット端末を購入したが、端末をほとんど



健康的な木々

触ることなく、昨年4月、93歳で亡くなった。端末のソフトの面白さに気付き、保育に導入すると園児は一斉に目を輝かせた。「誰でもどこでも使えるデジタル技術は、保育や教育の幅を広げる。今後は幼稚園・保育園と小学校で足並みをそろえる必要がある」と提言する。9月からは鹿児島国際大学で、保育の非常勤講師として教壇に立つ。鹿屋市吾平町上名に妻と長女の3人暮らし。趣味は卓球。ギターも得意で園児の前で演奏する53歳。(稲富大介)